

佳作

「やらないで後悔」より「やって後悔」

山形大学附属中学校

3年 佐藤 結花

私は部活動で陸上競技をしていた。幼稚園の時はかけっこが得意で、小学校でも学年で男子と1番を争うくらい足が速かった私は、中学校の部活動になんとか陸上競技を選んだ。入部してからの私の部活動での成績は、実に優秀だった。初めての市中総体、100メートル走で優勝。さらに県大会でも決勝に残った。その年の新人戦地区大会、100メートル走と初めて出場したハードル走の両方で優勝。いわゆる2冠というやつだ。さらにその年は地区の優秀選手賞をもらった。2年生になっても私の勢いは止まらなかった。100メートル走で東北大会に出場したのだ。予選敗退という結果だったが、東北大会出場という肩書だけで、私は十分満足していた。その余韻をずっと引きずっていたせいか、その年の冬はあまり陸上の練習に力を入れなかった。県強化指定選手にも選ばれ、強化合宿や強化練習会への招集もかかっていたが、私は一度も参加しなかった。

3年生になった。私は今年も地区大会を通過し県大会出場を決めた。しかし私は悔しかった。なぜなら地区大会で一つも1位をとれなかったからだ。100メートル走は3位、ハードル走は2位という結果だった。県大会の出場枠は2位までなので、100メートル走での県大会出場はかなわなかった。この時から何となく嫌な予感がしていた。もしかしたら今年、東北大会出場は厳しいかもしれないという不安と焦りが、何度も私の頭をよぎった。

嫌な予感の的中した。県大会の結果は6位。私の中学陸上は、県大会で終わってしまった。後悔が残った。単純に練習量が足りなかったんだと思った。東北大会に進む選手たちと私とでは、アップの仕方やその動きから練習量の違いは明白だった。すました顔でハードルを跳んでいる選手も、その裏には身を削るような努力があったのだろうと思った。そんな選手たちを私は心から尊敬した。しかしそれと同時に、身を貫くような悔しさを感じていた。大して練習もしていない私に、悔しがる資格なんてないのかもしれない。けれども負けは負け。悔しくないわけがなかった。

ここから、私のチャレンジが始まった。県大会が終わってから、私は毎日のように筋トレとストレッチをすることを始めた。もちろん夏休みに入った今も継続している。ただがむしゃらにやっているのではない。自分の走っている姿を見て足りないと思った部分や、コーチから指導された部分を補うようなメニ

ューを自分で組むようにしている。私は別に将来競技者になりたいわけでもないし、県大会で優勝したいなんて思わない。しかし、私は県大会が終わった後、自分の陸上人生をこんな不甲斐ないもので終わらせたくないと思った。そして、高校でも陸上競技を続けようと決意したのだった。

私は何か新しいことに挑戦しようとする時に、いつも自分自身に言い聞かせている言葉がある。それは、『やらないで後悔』より『やって後悔』という言葉だ。これは、去年の学年主任の先生がいつも口にしていた言葉だった。今回の私のチャレンジは、続くかどうかなんてわからないし、結果につながるかどうかともわからない。けれど、「もう少しやっておけば良かった」なんてもう思いたくない。そんな情けない後悔はしたくない。やらなかったことに対する後悔は、なぜか人を惨めな気持ちにする。そしてそういう時、人は自分が努力や挑戦をしなかったことに対して言い訳をしようとする。一方で、「やらなければ良かった」という努力や挑戦をしたことに対しての後悔は、実に一時的なものだ。その上、今まで積み上げてきたものが自分の力になったり、いつか「経験」と呼べる価値に変わったりする。前までの私は、「やることに意味がある」というような言葉には全く共感できず、少し根性論じみていると思っていた。けれども今は少し、この言葉を信じてみようと思っている。

「やらないで後悔」から始まった、私の小さなチャレンジ。それは誰かに褒められるわけでもなく、結果につながるかもわからない、私のためだけのチャレンジ。これからも私は、小さなチャレンジを積み重ね、私自身を変えていく。レベルアップさせていく。このチャレンジを価値あるものにするのは、私自身だ。